# ２人の在り方　相棒で、運命共同体で、それから‥‥

ちびまろん

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

江戸川コナンと灰原哀の物語。

コ哀が嫌な方、新蘭派の方はご遠慮下さい。

Ｒ―１５と残酷な描写、蘭厳しめは念のため。

フォレストページの闇と光というＨＰ、またｐｉｘｉｖでコナン女子という名前で同じものをあげてます。

フォレストページ　ｈｔｔｐ：／／ｉｄｌ５．ｆｍ―ｐ．ｊｐ／６４７／ｙａｍｉ００ｈｉｋａｒｉ／

ｐｉｘｉｖ　ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｕｓｅｒｓ／４４６７１２０３

# 目次


1. 良い報せ ―― 1
2. 決戦前夜 ―― 4
3. 作戦決行（前編） ―― 7
4. 作戦決行（後編） ―― 10
5. 悪夢 ―― 13
6. 告げる想い ―― 16
7. 告げる想い another side ―― 19

# 1．良い報せ

「ったく。あいつらが遊具に夢中になってるうちに暗くなってきちまったじゃねーか。」
「あら、そういうこと言いながら元太君たちに勝負って言われてムキになってたのは誰でしょうね？」
「う・・」
　今日は2年生の授業最初の日。校庭には2年生になると使える遊具があるので、
　2年生たちは放課後になるとこぞって校庭へと飛び出していった。
　少年探偵団の3人の子供たちも例外でなく、
　今日は元太の下駄箱に依頼がないことにも気を留めず一目散に遊具に向かっていき、
　最初は呆れていたコナンも最後には一緒になって遊んでいた。
「あ、今日も晩飯はオメェんとこで食っていいよな？」
「それならスーパーに寄らなくちゃ。あなたの分もー」
　ピリリリリ、ピリリリリ
　コナンの携帯が鳴る。
「悪りぃ、降谷さんからだ」
「コナン君！悪いが今から来てくれ。組織のことについて大事な会議だ。もちろん哀君も。」
「分かりました。今すぐ行きます」　ピッ
「だ、そうだ。行くぞ、灰原。」
「ええ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「では、全員揃ったのでまずは私から。
ー組織のアジトの場所が判った」

「‼︎」
　降谷の言葉に、その場の全員の顔が驚きに包まれる。
「それって、ゼロ、例の〝あの方〟もいるのか?・」
「ああ、ジンやラムなど、幹部の殆どもいる」
「・・・・」
「灰原」
「え、ええ、大丈夫よ」
　コナンが哀の顔が強張っていることに気づき声を掛けると哀は返すが、その顔は青ざめたままだ。
「大丈夫だ。約束しただろ?・必ずオメェを守ってやるって」
「・・そうね」
　哀を安心させようとニカっと歯を見せて笑ったコナンに哀も少し微笑む。
「諸々の用意が必要だが、かといってやつらに移動されてしまっては元も子もない。
　１週間後決行する。人員は——」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　阿笠邸に帰って来た２人は、博士と夕食を食べていた。
「そういえば、探偵事務所のあの子には連絡しなくていいの?・」
「あ!・そーいやここんとこ電話してねーな・・・・」
（あれ?・前は毎日のように電話しようと思ってたのに・・なんでここんとこ電話を忘れてたんだろ・・）
　コナンは首を傾げたが、（ま、後で連絡すればいっか）と考えるのをやめ、ご飯をおかわりした。

「もう!・なんで連絡くれなかったのよ!・」
「悪りぃ悪りぃ、連絡できなくて・・」
「本当よ!・待ってるのに!・それに何で帰ってこないの!・あ、それにね、」

「蘭、聞いてくれ。今まで追ってた大きな事件がもう少しで終わるんだ。
　生きて帰れるかわからないけど――――――いや、必ず帰る。だから待っててくれ。」
「何よそれ！生きて帰るなんてカッコつけちゃって！
　こんな大馬鹿推理之助待っててあげられるの私くらいよ！」
（あれ・？）コナンは違和感を覚えたが、あまり気にせず
「ああ、蘭には感謝してる。じゃ、またな」
　というと電話を切った。
（何で今オレ、蘭に腹が立ったんだ・？）
　心にモヤモヤとしたものを抱えながら。

「灰原、コーヒー淹れてくれ」
「はいはい」
　博士は、キック力増強シューズの改良の為、部屋に篭っていて、
　哀は横で雑誌を読んでいる。
　２人で静かにコーヒーを飲んでいる内にコナンは、自然と肩の力が抜けていくのを感じた。
（阿笠邸は自然体でいられるから、心地良いんだよな・あ、そうだ）
「灰原、明日明美さんのお墓に行かないか。」
「・そうね、行くなら今の内かも
　組織との戦いの前に行っておきたいから」
「んじゃ、博士に言っとくよ。」
「ありがとう、工藤君」
　突如見せた哀の笑顔に、コナンは顔が赤くなるのを感じたが気のせいだと自分に誤魔化した。
（灰原が可愛く見えただなんて、疲れてただけだ）
「な、なんだよオメェが素直に礼言うとか。
　明日は雪でも降るのか？」
「失礼ね、私だってありがとうくらい言うわよ。」

## 2・決戦前夜

決戦前夜、夜中。
コナンと哀は、博士と共に公安の手配したホテルにいた。
コンコン
ガチャ
「なんだ、博士？オレ寝てたんだけど・・
灰原？」
コナンの部屋のドアをノックしたのは、哀だった。
「どうしたんだ？」
哀は、自分がいつのまにかコナンの元を訪れていたことに驚いて踵を返そうとした。
（・・工藤君を頼るなんて、いくらなんでもどうかしてる）
「い、いえ、なんでもないわ」
しかしそれは叶わなかった。
「こんな時間にそんな青白い顔して、人に頼らないオメェがオレんとこ来て、何でもないってことはないだろ」
腕を掴まれ引き留められたからである。
「・・・・・夢を見たの」
哀はポツリと零した
「ジンが現れて、私に銃を向けて・・・ジンを撃とうとするんだけど当たらなくて・・・・
撃たれると思って目を瞑るのに、私は撃たれなくて、
目を開けると目の前で私を庇ってアナタが血を流している・・そんな夢」
「何言ってんだよ、灰原。オレは死なねぇぞ？
勿論オメェを死なせるつもりもない。そんな事考えんな。な？」
「でも、恐ろしくて・・アナタは怖くないの？」
そう言った不安げな哀の顔を見たその瞬間、何故だかコナンは哀を抱きしめていた。
哀は驚いた顔をしているが、コナンには見えない。

「オレだって怖くねえっつったら嘘になる。
でも、博士がいる。赤井さんがいる。降谷さんがいる。
みんながいる。勿論、オメェも。だから、オレは戦いに行こう、って思える。
そーゆーモンだろ?」
いつものように歯を見せて笑うコナンに、哀も微笑み返した。
翌朝。
ガチャ
「おーい新一」
コナンの部屋のドアを開けた博士は驚いた。
コナンと哀が寄り添うように眠っていたからである。
しかし、ここ数日哀が魘されていた事を知っていた博士は、眠る哀の顔が穏やかなことに安心し、そっとドアを閉めた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

入れようと思ったのですが入れると話の流れがおかしくなるし→の話とかぶるのでやめた小話。
決戦当日の朝の設定です。(作者より)

コンコン
「灰原?いるか?」
「ええ、どうぞ」
コナンは部屋に入ると、紙ナプキンに包まれた何かを差し出した。
「?」
「オメェ、朝飯ろくに手をつけずに部屋に戻っただろ?
だから、ホラ。」
哀がナプキンを開くと、小さめのパンが3個入っていた。
「パンは取り放題みたいになってたから・・
食欲湧かねえのはわかるけど、ちゃんと食べねーと出る力も出

ねー」

「・・・ええ、そうね。食べるわ」

## 3．作戦決行（前編）

「ヒロたちは打ち合わせ通りに。ジョディたちも。
　赤井にはここでスタンバイしてもらって、君たちは――――」
「任せろ」
「ええ、了解」
「ああ」
　降谷が見取り図を見ながら作戦の最終確認を行う。
「哀君はコナン君と共に研究室へ。敵への対応よりデータのコピー、消去を優先してくれ。」
「「はい。」」

「じゃあ、時計が２３：００ちょうどを指したら各自突入してくれ。」
　皆が皆、息を潜めてその時を待つ。

「灰原」
「何よ」
「ぜってーオメェを守ってやっから」
「カッコつけちゃって」
　カチッ
　時計の長針が１２を指す。
「行くぞ！」

　先鋭部隊に続き突入する。
　すぐにあちこちで始まった銃撃戦を横目に、３人は研究室へと急ぐ。
　途中こちらへ向かってきた敵もいたが、赤井が素早く相手の腕を撃ちぬく。
　コナンも哀も銃は撃てるが、経験は少ない上に子供の体に銃の反動は少しきつい為、走りながら撃つことはしない。

「そこの角を曲がれば研究室よ！Ｓｈｅｌｌｙ！Ｓｉｌｖｅｒ　Ｂｕｌｌｅｔ！」
近くに現れ、走る哀らの目的を察したベルモットがそう言った瞬間、５人程の黒ずくめの男たちが現れ、
ベルモットはすぐさま彼らの内２人に向け銃を撃つが、ちょうど弾が切れ、３人が残ってしまう。
しかしコナンの撃った弾丸によって、
その隙にベルモットを撃とうとした男の手から銃は弾き飛ばされた。
「今の内に行きなさい！」
その間に再装填（リロード）を済ませたベルモットの言葉を背に２人は走るが、もう１人奥から現れる。
コナンは相手の弾丸を避けながら哀にそう叫び、シューズのボタンを押してボールを膨らませる。
「クソっ！灰原、先に行け！」
哀が不安そうにコナンをチラとだけ見てから角を曲がったのを確認し、コナンはボールを相手に蹴った。
相手は今まで相手にしてきた犯人とは違い、自分に向かってくるボールを一切の躊躇なく撃ち抜くが、それはコナンにとって想定内。
相手の意識と銃がボールに向いた瞬間を狙って、相手の腕を撃ち抜く。
しかし次の瞬間、角の先、哀が行った筈の方から銃声が聞こえ一目散に研究室へと向かう。
「灰原ぁ！」
（クソっ！先に行かせなけりゃ良かった！）
角を曲がると――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

哀ｓｉｄｅ

工藤君を置いて先に角を曲がる。
心配だけれど、相手は1人だし、何より先に行けと言ってくれたのに残るわけにはいかない。
研究室のドアを開けようと近づくと、工藤君のところから離れて治まった筈の組織の匂いがした。それも、強く。
弾かれたようにドアから離れる。
物陰から現れたのは忘れもしない、銀の長髪。
私を最も畏怖させ、体を逆らえなくするようなその恐ろしい声でその人は私のコードネームを呼んだ。
「よう、シェリー。まさかこんな姿になっていたとはな」
――ジンだった。
銃を片手でこちらへ向けながら、ニヤリと笑みを浮かべる。
バアン
思わず彼に向け銃を撃つが、震えた両腕はまともに狙いを定められず、弾丸はジンの横をすり抜けていった。
「ククッ・そんなに体を震えさせておいて俺に当たるとでも思っているのか？」
もうダメだ・・でもせめて、ジンにも一発くらい当ててお姉ちゃんの仇を討ってから死にたい。
私が覚悟を決め、もう一度銃口を上げたその時・・
「灰原ぁ！」

# 4．作戦決行（後編）

コナンｓｉｄｅ

「灰原ぁ！」

一瞬最悪の事態も脳裏をかすめたけれど、

灰原は無事でそこに立っていた。

その両手に構えられた銃口から硝煙が出ているから、

さっきの銃声は灰原が撃った音だったんだろう。

「フッ・騎士（ナイト）のお出ましか？」

「ダメ！来ないで、工藤君！」

「工藤・お前がＡＰＴＸ（アポトキシン）４８６９のリストで不明から死亡に書き換えた奴の名は工藤新一だったな。

ということは、そいつも小さくなった奴という事か・・

それに・お前の弱点は大事な人が死ぬ事だったな」

そう言い終わるかどうかの内に、ジンはオレに向けて銃を撃った。

それと同時にオレの目の前に、灰原が躍り出た。

バアン

灰原の身体が空中で一瞬反り、そのまま落ちた。

「灰原！」

「く・ど・くん・よかった・」

灰原の身体を抱えて呼びかける。

「灰原！しっかりしろ！」

「くど・くん・アナタに逢えて、良かった・」

そう言うと、灰原の目は閉じられ、動かなくなった。

血が、どんどん溢れていく。

「灰原！灰原！」

それと同時に、未だ嗤い続けているジンに対して、蘭を殺そうとした犯人にも抱いたことのないほどの猛烈な憎悪がオレの体を満たす。

バアン　バアン

ジンに向けて銃を２発続けて銃を撃つ。

放たれた弾丸は片手で撃ったにもかかわらず、オレの狙い通り奴の

両肩に命中した。
「ガッ・・」
それでもジンは、懐から何かを出し、スイッチに手をのばし――
バアン
どこからか飛来した弾丸に胴を撃ち抜かれ、意識を失った。

「ボウヤ!・」
ジンを撃ったのは、赤井さんだった。
赤井さんは灰原の手首を触ると、顔を上げる。
「まだ生きてる!・おい!・」
赤井さんの声に、近くにいたＦＢＩの人が灰原を抱えた。
灰原が生きてる・・?
「オレも行きます!・」
任務なんか忘れて叫び、灰原を抱えた人について走る。
走っている最中に、誰かが爆発すると叫んだ。
「逃げるぞ!・」
子供の足では大人についてけず、灰原を抱えた人にだけでなく
人の波にも置いていかれそうになったオレを、赤井さんが抱えた。
建物を出、緊急の集合場所の広場に着いた時。
ドオン
建物が、爆発した。
ジンもあの中のままな筈だけど、オレの頭の中は、灰原のことで
いっぱいだった。
赤井さんの腕の中から飛び降り、灰原を探す。ちょうど救急車に乗
り込む所だった。
「オレも乗ります!・」
扉が閉められようとしていた救急車に飛び乗る。

---

今、灰原はこの扉の向こうで手術中だ。

帰ってこい、灰原。
運命から逃げないって言っただろ。
明美さん、灰原を守ってくれ。
ガー
扉が開く音に、椅子から立ち上がる。
「灰原は！」
「一命は取り止めました。
まだ予断を許さない状況ではありますが、あとは意識が目覚めれば一安心です。」
『一命を取り止めた』
その言葉に肩の力を抜く。
「灰原の顔を見ることは――――」
「・・・ガラス越しでしたら。」
看護師に連れられ、灰原の部屋へ行く。
酸素マスクとあちこちの包帯が痛々しいが、身体がゆっくりと上下しているのを見て、安心する。
「コナン君！」
降谷さんがやってきた。灰原の姿を見て、彼もほっと息を吐く。
「コナン君も怪我をしているから、診てもらって、そうしたら帰ろう。」
降谷さんに促されその場を離れる。
そのあとで、あと数ミリずれていたら灰原の命はなかったと聞いた。
明美さん、ありがとうございます。
灰原を守ってくれて。

# 5．悪夢

コナンｓｉｄｅ
医師の予想とは反対に灰原は中々目覚めず、一週間たった。
灰原自身が、目覚めたくないのかもしれない。
でも、オレは――――
「ん、やっ――」
「灰原?!」
目覚めたのかと思い顔を見るが、瞼は閉じられている。
なのに灰原は、何かから逃れようともがくように身を捩る。
「いや、やめて、ジン、私を殺して」
「みんなはやめて」
「殺すなら私にして」
「工藤君逃げて」
「灰原!」
うわ言をつぶやく灰原の身体を抱きしめた。
それでもなお暴れる彼女をさらに強く、抱え込むように抱きしめ、語りかける。
「大丈夫だ、オレはここにいる。ジンはもういない。みんな無事だ。だから灰原、戻ってこい!灰原!」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
哀ｓｉｄｅ
ここはどこ…?
暗闇の中を独り歩いている。
独りは慣れていたはずなのに、いつからかみんながいることの方に慣れて、独りは心細くなってしまった。
？
誰かが見えた。
「ねえ、あなた――!」
振り向いたのは、ジンだった。

こちらに銃口を向けている。
「よう、シェリー」
「いや――」
後ずさりながら武器は無いかと自分を触るが、何も持っていない。
なおもジンは微笑すら浮かべながら私に詰め寄る。
「誰かに助けを求める気か？お前に関わったやつは殺してやったよ。あのじいさんも、あのガキたちも。ほら」
ジンが指す方向を見ると、博士と吉田さんたち3人が血だらけで倒れている。
思わず駆け寄るけれど、彼らの身体は冷たい。
博士も、吉田さんたちも、私のせいでー
「なんで？なんで！私じゃなくてあの子たちを！
博士もあの子たちもなんの関係もないのに！」
「お前に関わったからだよ。」
そんな――
蹲った私の脳裏にふとした疑問が浮かぶ。
工藤君は？
その時、
「灰原ぁ！」
聞き慣れた声と共に彼が駆け寄ってきた。
「ダメ、逃げて！」
必死にそう言うが、彼は止まらない。私を背に隠すようにジンに向き合った。
「テメェ・・博士たちを・・」
彼が怒りに震えているのが判る。
それと同時に守れなかった自分自身を責めていることも。
でも、でも――
「逃げて！」
私がそう言った瞬間。
「オメェを置いて逃げるわきゃねーだろ」
その言葉と、銃声と、どちらが先だっただろう。彼は胸を鮮血に染

めて、倒れた。
「い、や、いや、いや、いや――」
「ハッ」
工藤君の身体にすがりつく私を嘲笑ったジンが再び銃口を向けたその時。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「灰原!・」「灰原!・」「戻ってこい灰原!・」
聞き慣れた、今目の前で倒れた筈の彼の声が聞こえてきた。
その声と共に、暗闇が少しずつ消えていくのが判る。
みんなの死体も、ジンも。
代わりに光が差してくるのを感じる。
その光に手を伸ばす。
「工藤・・君?・」
「灰原!・目が覚めたのか?・よかった・・」
工藤君が私を抱きしめる。そっと、愛おしむかのように。
彼にはそんな気は無いのだろうけど、それが少しこそばゆくて、哀しい。
だから、いつもどおりにする。
「ちょっと、離れてくれない?・暑苦しいんだけれど。」
「さっきまでうなされてたってのにかわいくねー」
そうか、アレは悪夢だったのね。
工藤君がその闇から引き揚げてくれた。
「ありがとう」
「なんか言ったか?・」
「いーえ。」
だから、お礼は言うわ。小さくだけれど。
そう考え笑った私に、彼は不審そうな目を向けてきた。
「変なヤツ・・ま、とにかく医師とか呼んでくるから。あ、博士にも連絡しないとな。お前一週間も眠ってたんだぞ。博士が心配してるよ。」
そう言って出て行く彼を見送った。

# 6．告げる想い

コナンｓｉｄｅ

「よ、灰原。」
「く、江戸川君。」
病室のドアを開け、名前を呼んだオレを見て灰原は工藤くんと言いかけたが、オレの後ろに蘭がいることに気づき言い直した。
「哀ちゃん！大丈夫？」
「ええ、もう平気よ。」
「それにしても、寂しくなるなあ。二人ともいなくなっちゃうなんて。」
お茶を煎れ、座った蘭は言った。
「でもとてもいいことがあるから大丈夫よね？」
「いいこと？」
「新一さんが帰ってくるんでしょう？」
「ああそうだね！
もうこんなに待たせておいて、帰ってきたら文句言ってとっちめてやるんだから！」
こえー。
回し蹴り飛んできそうだな・・
ふと灰原を見ると、驚いたような顔をしていた。蘭は気づいていないらしい。
「帰ってくるのが嬉しくないの・・？
恋人なんじゃないの・・？」
いや蘭は、恋人だと思っている奴に対してだって照れでそう言うんだよ。それをあとで説明しなきゃなあーとか思っていると、信じられない言葉が蘭の口から飛び出した。
「やだなあ、哀ちゃんたら！新一とはそんなんじゃなくて！結構マセてるんだね、今の小学生って。
新一とは幼馴染みだよ？

ほら、哀ちゃんにとっての光彦君とか元太君とか、コナン君とか。」
オレがロンドンで告白して、修学旅行でＯＫをもらって、そのあと『つきあってるんだよね？』ってメールも来た。のに、恋人だと思ってたのはオレだけだったんだろうか？
いや、灰原のことがあるんだからその方が楽なんだけど――
「私にとって江戸川君は只の幼馴染みじゃないわ。」
は？オレの思考が停止した。
いやたしかにオレとこいつは幼馴染みではないが、江戸川コナンと灰原哀は幼馴染みだ。なのに何を言い出して
「私、江戸川君のことが好きだもの。只の幼馴染みだなんていやよ。」
「そっかあ、哀ちゃんてやっぱりコナン君のこと、が・・」
蘭の言葉がつまったことで、オレはようやく灰原を抱き締めていることに気づいた。
灰原もわたわたとしている。
これは珍しい。
いやそれよりも。
「すっげー嬉しい。灰原も同じ気持ちだったなんて」
「えど、がわ、くん・・？」
自分からあんなことを言ったくせに、動揺しているのがわかる、
「オレも、灰原が好きだ、
・・誰よりも。蘭よりも。」
最後の一言は灰原にだけ聞こえるよう、耳元で囁く。
「え、だってあなたには・・」
「蘭姉ちゃん、僕灰原さんと話したいからちょっと出ててもらえるかな？」
「あ、うん、ごめんね。」
蘭が出て扉を閉めたのを確認し、灰原に向き直る。
「気づいたのは少し前だけど、多分もっとずっと前から灰原のことが好きだった。」
「だって、あなたには蘭さんが、あなただっていつも「ああ。たしかにいつもオレは蘭のことばっかりだった。でもそれは、大事な妹とかに

対する気持ちだったんだ。」
「もう冗談とは言わせねえからな。『江戸川君が好き』って言ったのは聞いてたからな。」でも・・」
「オレが、灰原が好きで、灰原のことが好きで、恋人になりてーんだよ。なあ、オレのアイリーンになってください。」
「・・はい。」
そう言って笑った顔があまりに綺麗だったので、思わずキスをしていた。
触れるだけのキス。
「子供の身体じゃあ、これしかできないな。」
「何考えてるのよ、スケベ。」
「あ、いや違って、いや違わないというか・・えーっと。」
あたふたするオレに、クスクスと彼女は笑った。
「あ、せっかくだから名字呼びはやめようかな」
「でもあの子たちになんて言われるか・・」
「んじゃ、志保。」
「っ！」
「二人の時はそう呼ぶ。いいだろ？」
「勝手にすれば。」
そっぽを向く志保の耳が赤いのは見逃さなかった。

# 7．告げる想い　ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ

蘭ｓｉｄｅ

コナン君と一緒に、哀ちゃんのお見舞いに来た。

大怪我をしたらしいとしか分からないけれど。

「哀ちゃん！大丈夫？」

「ええ、もう平気よ。」

良かった、たしかに元気そう。

暫くしてから、ふと言った。

「それにしても、寂しくなるなあ。二人ともいなくなっちゃうなんて。」

新一がいない間慰めてくれたこともある、新一にそっくりな小１とは思えないほど賢い、でも可愛いコナンくん。

最初はあまり話してくれなかったけど、徐々に心を許してくれた、同じように小１とは思えない、大人びた哀ちゃん。

二人とも、アメリカの両親のところに帰ってしまうらしい。

「でもとてもいいことがあるから大丈夫よね？」

「いいこと？」

って何？

「新一さんが帰ってくるんでしょう？」

「ああそうだね！

もうこんなに待たせておいて、帰ってきたら文句言ってとっちめてやるんだから！」

もう！思い出すだけで腹が立つ！

「帰ってくるのが嬉しくないの・・？

恋人なんじゃないの・・？」

そりゃ嬉しいけど。って！

「やだなあ、哀ちゃんたら！新一とはそんなんじゃなくて！結構マセてるんだね、今の小学生って。

新一とは幼馴染みだよ？

ほら、哀ちゃんにとっての光彦君とか元太君とか、コナン君とか。」

「私にとって江戸川君は只の幼馴染みじゃないわ。」
え?
「私、江戸川君のことが好きだもの。只の幼馴染みだなんていやよ。」
「そっかぁ、哀ちゃんてやっぱりコナン君のこと、が‥」
コナンくんが哀ちゃんを抱きしめたことに驚いて、黙ってしまった。
今時の小1って、そんなことするの~?いや二人が大人びてるだけ?
「すっげー嬉しい。灰原も同じ気持ちだったなんて」
「えど、がわ、くん‥?」
うわぁ、すごい。コナンくん、可愛いと思ってたけど今のコナンくんはちょっとかっこよく見える。
「オレも、灰原が好きだ、
‥誰よりも。」
あれ?コナンくんってオレって言ってたっけ?
いや、前にも哀ちゃんと話している時は、可愛いコナンくんの雰囲気じゃなかった。
「え、だってあなたには‥」
あなたには?何々?ちょっと気になる!
「蘭姉ちゃん、僕灰原さんと話したいからちょっと出ててもらえるかな?」
「あ、うん、ごめんね。」
まあ、しょうがないか。病室を出る。
さてと、まだ新一が帰ってくること園子に言ってなかったから、電話しよ!
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
哀side
「よ、灰原」
「く、江戸川君。」
聞き慣れた声に工藤君、と呼ぼうとしたが、彼の後ろに蘭さんがい

ることに気づき慌てて言い直す。
「それにしても、寂しくなるなあ。二人ともいなくなっちゃうなんて。」
暫くして蘭さんは言った。
「でもとてもいいことがあるから大丈夫よね？」
そう、あなたが一番望んでいること。
「いいこと？」
「新一さんが帰ってくるんでしょう？」
そう。もうすぐ、あなたに彼を返すから。
「ああそうだね！
もうこんなに待たせておいて、帰ってきたら文句言ってとっちめてやるんだから！」
え・・？
彼女がそういう面においてはシャイで、それが彼女の照れ隠しなことは知っていた。
それでも、多少は嬉しそうにしてもいいのではないか。
「帰ってくるのが嬉しくないの・・？」
だって、あなたと彼は、
「恋人なんじゃないの・・？」
照れながらも肯定するものだと思っていた。なのに、
「やだなあ、哀ちゃんたら！新一とはそんなんじゃなくて！結構マセてるんだね、今の小学生って。
新一とは幼馴染みだよ？
ほら、哀ちゃんにとっての光彦君とか元太君とか、コナン君とか。」
あなたにとっての彼が、円谷君や小嶋くんと同じ・・？
そう、貴女はそう言うのね。なら、良いはずよね。私が告げても。
「私にとって江戸川君は只の幼馴染みじゃないわ。」
工藤君は勿論、呆気にとられている。
元々、言うつもりは無かった。でも、貴女が恋人じゃないと言うのなら。
「私、江戸川君のことが好きだもの。只の幼馴染みだなんていやよ。」

さあ、あなたはどう出る？
「そっかあ、哀ちゃんてやっぱりコナン君のこと、が・・」
蘭さんの言葉が途切れる。
なぜ？なぜ私を抱きしめるの？
あなたは「ごめん、蘭がいるから」と言うのでしょう？
でも、それを言うのは蘭さんが居なくなってからのはず。
「すっげー嬉しい。灰原も同じ気持ちだだたなんて」
「えど、がわ、くん・・？」
やめて。『同じ気持ち』なんて言われたら期待してしまうから。
「オレも、灰原が好きだ。・・誰よりも。」
それでは、まるで
「蘭よりも。」
本当に、恋愛感情だとでも、言うの？
「え、だってあなたには・・」
「蘭姉ちゃん、僕灰原さんと話したいからちょっと出ててもらえるかな？」
「あ、うん、ごめんね。」
蘭さんが病室を出て行くのを見届け、彼は私に向き直る。
「気づいたのは少し前だけど、多分もっとずっと前から灰原のことが好きだった。」
「だって、あなたには蘭さんが、あなただっていつも「ああ。たしかにいつもオレは蘭のことばっかりだった。でもそれは、大事な妹とかに対する気持ちだったんだ。」
「もう冗談とは言わせねえからな『江戸川君が好き』って言ったのは聞いてたからな。」でも・・」
私が、人を殺した私が・・
「オレが、灰原が好きで、灰原のことが好きで、恋人になりてーんだよ。なあ、オレのアイリーンになってください。」
いいのだろうか。でも、その誘惑はあまりに魅力的で、抗えなくて。
「・・はい。」
そう言って私が笑みを浮かべれば、彼はキスをした。

触れるだけの、優しいキス。
「子供の身体じゃあ、これしかできないな。」
「何考えてるのよ、スケベ。」
「あ、いや違って、いや違わないというか・・えーっと。」
工藤君があたふたしている。おかしくて、クスッと笑ってしまった。
「あ、せっかくだから名字呼びはやめようかな」
「でもあの子たちになんて言われるか・・」
そんなの、言い訳。あなたに名前で呼ばれたら、心臓が持ちそうにないから。
「んじゃ、志保。」
「っ！」
ずるい。顔が赤くて、心臓が煩くて、しょうがない。
「二人の時はそう呼ぶ。いいだろ？」
「勝手にすれば。」
そう言って顔を背けたけれど、赤くなってしまった耳までは隠せなかった。